

3 早期対応の中心的役割を果たす人材を養成する①

『生きる取組』

～子どもたちの SOS に耳を傾げるための指導資料（ゲートキーパー手帳・
虎の巻（研修手引き書）・DVD）作成と実践研修の開催について～

（実施期間）平成 25 年度	（基金事業メニュー）人材養成
（実施経費）教育素材 9,975,000 円	（実施主体）北海道
意見交換会・研修会 3,169,885 円	
／計 13,144,885 円（13,144,885 円）	

【事業の背景・必要性・目的】

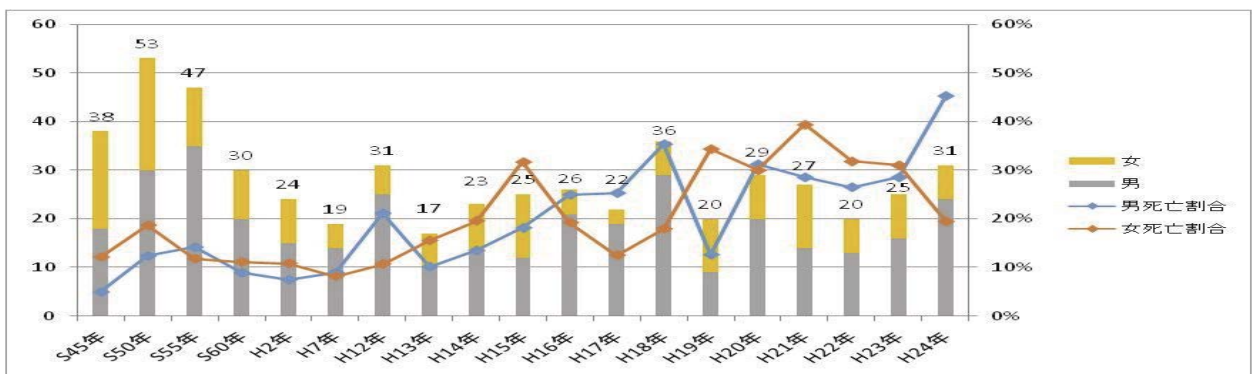
北海道では、平成 21 年度より、相談支援者等を対象に自殺予防のゲートキーパー研修を開催してきたが、平成 24 年度には、若年者の自殺予防対策として、新たに北海道教育委員会との共催で教職員を対象として、ゲートキーパー研修を開始した。研修の受講者数やアンケート結果から、教育関係者に対するゲートキーパーの養成ニーズが確認できたため、平成 25 年度も研修会を継続するとともに、自殺予防対策の専門家や教育関係者による意見交換会を実施し、子どもたちの SOS に気づくための方策を検討した。この意見交換会や研修受講者の意見等を元に、継続的な自殺予防をになうためのゲートキーパーの養成や研修終了後も活動するための指導資料として「ゲートキーパー手帳」「DVD」「研修開催のための手引き書（虎の巻）」を作成し、道内の教育関係者や保健所、市町村の保健師に保健師に配布するとともに研修会で実際に活用し、自殺予防に有用な知識やスキルの向上を図った。

【地域の特徴・自殺者数の動向】

北海道における自殺者数は、平成 10 年に前年から 403 人 増加して 1,517 人になって以降毎年 1,500 人前後で推移していたが、平成 21 年以降は減少傾向にある。一方で、若年者の自殺については、15 歳から 39 歳までの死亡順位で上位を占め、死亡者の中の自殺の割合も増加傾向にある。

総人口	年齢 3 区分別人口割合		
	年少(0～14 歳)	生産(15～64 歳)	老年(65 歳以上)
5,444,307	640,569	3,372,665	1,430,743

（出典：平成 24 年 10 月 1 日住民基本台帳年齢別人口※札幌市を含む）



【事業目標・事業内容】

教育関係者が「子どもたちの SOS に耳を傾げるゲートキーパー」を養成するために、「きょうしつ」（「き：気づき」「よ：良く聴き」「う：受けとめて」「し：信頼できる専門機関に」「つ：つなげよう」）を Key Word に、3 種類の指導資料を作成し、それを用いて現場ですぐに活用できる実践的な研修会

3 早期対応の中心的役割を果たす人材を養成する①

を開催した。

1 研修会

(1) 対象者

ア 教育関係者向けゲートキーパー研修

小・中学校・高等学校・特別支援学校の教諭、養護教諭、管理職（校長・副校長・教頭）、教育相談員、市町村教育委員会職員等

イ 子どものSOSに耳を傾げるための実践研修（模擬研修・専門研修）

模擬研修：平成25年8月開催研修出席者で同意を得られた教育関係者、保健師及び意見交換会メンバー

専門研修：道内の小学校・中学校・高等学校・特別支援学校の教諭、養護教諭、管理職（校長・副校長・教頭）、教育相談員、市町村教育委員会職員及び保健師、各総合振興局（振興局）保健環境部（道立保健所）保健師等

(2) 受講状況

開催年度	平成24年度						平成25年度			
研修名	教育関係者向けゲートキーパー研修						模擬研修	子どものSOSに耳を傾げるための実践研修		
会場	札幌市	芽室町	札幌市	旭川市	札幌市	函館市	札幌市	帯広市	旭川市	札幌市
開催月日	7月26日	7月27日	1月12日	8月3日	8月4日	8月5日	11月30日	2月15日	2月23日	2月24日
受講者数	90名	51名	90名	42名	73名	48名	39名	31名	46名	78名
小計	231名			163名			39名	155名		
年度計	231名			357名						
総計	588名									

(3) 研修プログラム

ア 教育関係者向けゲートキーパー研修

内容	「子どもは死をどのように受け止めているか（子どもの死の概念）児童精神科医療の実践から」	「自殺予防教育の実践から～教員としてできること～」	「教員自身のメンタルヘルスを保つには～バーンアウトしないために～」
講師	北海道立精神保健福祉センター一部長（児童精神科医） 市立旭川病院診療部長	学校法人四天王寺学園 小学校 カウンセラー	兵庫教育大学大学院学校教育研究科教授 北海道立精神保健福祉センター所長 秋田大学大学院 准教授

イ 子どものSOSに耳を傾げるための実践研修（模擬研修・本研修）

内容	「『教室（きょうしつ）「気づいて」「よく聴いて」「受けとめて」「信頼できる専門機関につなげよう」』の取組とその実践」	「ストレスマネジメント教育とその実践」	インシデントプロセス法による事例検討
講師	学校法人四天王寺学園小学校 カウンセラー 北海道保健福祉部福祉局障がい者保健福祉課	国立大学法人北海道教育大学大学院釧路校 准教授	学校法人四天王寺学園 小学校 カウンセラー

3 早期対応の中心的役割を果たす人材を養成する①

2 意見交換会

(1) 開催回数

4回(10月14日・11月29日・12月1日・3月16日)

(2) メンバー

学校法人四天王寺学園小学校カウンセラー(助言者)、道内教育大学准教授・カウンセラー、北海道教育委員会(自殺、健康管理及び高校教育の担当部署、教育研究所)の職員

(3) 主な意見

10月	<ul style="list-style-type: none"> ・毎日接する教員が、全ての教育活動(教科や道徳、学校行事、給食、掃除など)の中で気づきや傾聴ができることが大切。教育現場全体のスキルを高めることで、子どものSOSに対応できる。 ・業務多忙な教員が、負担感を持たず日常的に何気なくできることが重要ではないか。 ・研修内容には、ストレスマネジメントなども入れると、実効性のある取組になる。
11月	<ul style="list-style-type: none"> ・手帳やDVD作成の目的及び配布方法に係る意図やスケジュールについて共通認識。 ・模擬研修の進行方法や内容、DVD効果の確認をしながら企画全般について意見交換。
12月	<ul style="list-style-type: none"> ・DVDのロールプレイ場面では、「教師と子ども」だけではなく「子どもと子ども」も活用できるとの感想があり、子どもは大人より子どもに相談するエビデンスに基づき入れることにする。 ・インシデントプロセス法やリラックス法は、地域の保健師と一緒に体験することにより、地域のつなぎ先と顔見知りの関係ができ地域の資源の活用が可能となり、教員の負担感を減少する。
3月	<ul style="list-style-type: none"> ・今後の企画では、必要な知識やスキルをじっくりと身につけるための研修を道内で数箇所実施するとともに、将来的にも研修が継続できるように、校内研修が実施できるリーダーを養成する研修が有効。(各地域の指導的立場を担ってもらえる人材の養成) ・特定の職種だけではなく、様々な立場の職員を参集した研修が有効(管理職と養護教諭など)。

3 指導資料

(1) 作成部数・内容

区分	内容
ゲートキーパー手帳	「子どもの自殺の実態」「実践的な対処：子どものSOSにはきょうしつ(教室)」「こんなときにどうするの」「ストレスマネジメント」「自殺予防教育」「相談機関一覧」等
研修虎の巻(手引き書)	「研修素材の組み立て方・研修の効果」「研修進行法」「インシデントプロセス法の進め方」「講師紹介」「取組の経過」「今どんな気持ち・どんな気分(表情の絵)」
演習用DVD	「ロールプレイ【教師と子ども】【子どもと子ども】」「お伝えしたいこと【教育の現場から】【児童精神科医から】」「ストレスマネジメント」「リラックス法」

(2) 配布先

区分	計	内訳			
		学校	教育関係部局	保健部局	その他
ゲートキーパー手帳	52,000	46,514	325	2,300	2,861
研修虎の巻(手引き書)	3,200	2,174	67	226	733
演習用DVD	3,200	2,174	67	226	733

3 早期対応の中心的役割を果たす人材を養成する①

【事業実施にあたっての運営体制】

北海道（障がい者保健福祉課・精神保健福祉センター・保健所）、北海道教育委員会で企画・周知・運営を実施。

【事業の工夫点】

- ・地域自殺対策緊急強化基金事業の終了後もゲートキーパー養成が可能となることを目的に、「全ての教育関係者が情報を手元に置けるゲートキーパー手帳」「繰り返し視聴し、大切な考え方や方法を理解し実践できるDVD」「ストレスマネジメントやインシデントプロセス法を用いた事例検討を取り組むための研修手法や講師等を紹介した虎の巻（研修手引き書）」を作成し、札幌市を含む全道の教育関係者と地域支援の保健関係部局に配布した。
- ・受講者が、重要な知識やスキルの理解を深化し、自分に合った方法を身につけ実践できることを目的に、自ら考えるワークブック形式とし、五感を使い体験できる内容とした。
- ・様々な意見を指導資料に反映させるため、意見交換会以外に模擬研修を開催し、現場教員の意見を聴取した。当初の意見交換では賛否両論あった内容についても、受講者の意見で有効性が確認できた場合は、指導資料に取り入れた。
- ・意見交換会メンバーとともに、資料の原稿作成や校正、関係部署との調整、DVD撮影・編集といった作成プロセスを共有したため、教育現場の実態に即した内容となった。



【事業成果、その他特筆すべき点】

- ・指導資料内容には、「子どものSOSのサイン」や「傾聴」に加え、実際にストレスをマネジメントする方法やリスクの高い子どもをチームで支えるインシデントプロセス法を取り入れたところ、受講後アンケートでは「是非実践したい」「職場の同僚や子どもたちに伝えたい」等好評だった。
- ・研修対象者を、教員だけではなく地域の受け皿の保健師を加えたことにより、地域の人的資源と協働する体験となり、チームで支援する意味をイメージできるようなプロトタイプを試みになった。
- ・児童精神科医は、「子どもがいい方向に進むためには、子どもが人といつながりを持つことが何よりも大切です。教師が様々な立場の人たちとよいつながりを持って、子どもと接してこそ、子どもが人を信頼して前を向くことが出来るといえるでしょう。だからこそ、教師が一人で抱え込んで悩むのではなく、教師が人と信頼できる人間関係を作って子どもとその家族とも信頼関係を作ることが出来ると考えられます。」とDVDでコメントし、指導資料とそれを用いた研修全般をとおして、丸抱えも丸投げもしないかわりの重要性を伝えており、教員の孤立化を防ぐことが期待できる。

(問合せ先) 北海道保健福祉部福祉局障がい者保健福祉課

精神障がい・発達支援グループ

TEL: 011-204-5279

E-mail: imagawa.youko@pref.hokkaido.lg.jp

URL: <http://www.pref.hokkaido.lg.jp/hf/shf/index.htm>